

琉球国王の肖像画「御後絵」の研究
ー描かれた衣装から見る国王イメージー

平川信幸（沖縄県教育庁文化財課）

「御後絵」は琉球王家第二尚氏歴代国王の肖像画で、古琉球期から近世琉球期の約 500 年間描き続けられた。しかし、それらの作品は沖縄戦で失われ、戦前に鎌倉芳太郎によって撮影された 10 枚のモノクロームの写真で、図像を確認出来るのみである。

その特徴は、幕が張られ、磚が敷かれた背景の中央に、イスに座し正面を向いた国王の左右に、多様な形態の持物を持った家臣団が配されるという、幾つもの図像の構成によって成り立っている。その衣装についても、国王は琉球の衣装ではなく、一貫して明朝の祭服である皮弁服を着用している。

皮弁服は唐衣装ともよばれ、冊封儀礼や朝拝儀式など王国の最も重要な儀礼で着用され、琉球の衣冠制度の中で、王権を象徴する最も重要な衣装であった。本発表では御後絵の皮弁服の変遷について、描かれた衣装と伝世資料を比較すると共に、国王衣裳の下図と国王衣裳製作に関する文献から検討していく。さらに「御後絵」に描かれた国王衣裳の分析を通して琉球をめぐる国際情勢と、国内における国王イメージの変遷について考察を行う。

御後絵の国王衣装は冊封の際に明朝から送られた皮弁冠・皮弁服に由来しているが、第二尚氏が琉球に君臨した 15 世紀から 19 世紀、中国では明から清へと王朝が交替し、その衣冠制度が大きく変動する。明朝期、冊封関係において琉球国王へ皇帝より与えられていた皮弁冠・皮弁服のセットは、衣冠制度が異なる清朝期になると与えられなくなる。代わりに清朝では、皇帝の権威を示す五爪の蟒が織り出された蟒緞などの反物が与えられる。琉球では与えられた蟒緞から国王の衣装を製作している。御後絵の国王衣装はこのように中国の王朝交代による衣冠制度の影響を受けている。

明朝期、御後絵において国王の衣装は明朝から与えられた皮弁冠と皮弁服で描かれることが定着する。しかし、明朝の規定や現存する皮弁服と描かれた比較した結果、御後絵の国王衣裳は、明朝から与えられた皮弁服をもとに、古来の帝王像より服飾品の図像を借用して、重厚な国王イメージを作りあげている。

清朝期の国王衣装は、清朝より与えられた蟒緞で皮弁服風に作製された。しかし、蟒緞の様子は、筒袖の満州族の衣装のためのものとなっており、振り袖のような漢民族の皮弁服を作製するためには、裁断し、改めて模様を再構成する必要があった。清朝期の御後絵の衣装は、蟒が見られない尚貞尚タイプ、蟒が現れる尚敬王タイプ、全体に蟒が配される尚育王タイプと段階的に荘厳化していく。

御後絵の国王衣装の変化は、中国の王朝交代にともなう衣冠制度の変化が影響を与えている一方で、皮弁服を衣冠制度に組み込んだ琉球王国の状況と、国王イメージに相応しい皮弁服を試行錯誤する琉球王国の思惑が反映されていると考えられる。